

南アルプス市立白根源小学校

令和4年度 前期学校関係者評価書

白根源小学校学校評価委員会

はじめに

本年度一学期も、学校はコロナ感染症対策を十分に講じた上での学校生活であった。職員も児童もできないことの多い中で、「今できる努力」をしながら、精一杯の学校生活を送ってきた。そのような中での学校評価である。まず、自己評価・児童アンケートの結果を職員全員で真摯に受け止め、成果や課題、今後の取り組みについてまとめた。そして、学校関係者評価委員会を開催し、より良い学校経営へと向かうよう話し合いの機会をもった。学校評価委員一人一人がそれぞれの立場から多方面の意見を出し、活発な時間となった。今後の学校運営の一つの指針としてほしい。

参加者 ○学校評価委員

- 小林 幸次（前源地区自治会連合会長）
- 有野 守代（主任児童委員）
- 河村 徳仁（元白根源小学校校長）
- 小林 正紀（元PTA会長）
- 有野 正樹（源地区自治会連合会長）
- 小澤 順司（源地区育成会長）
- 小原 健一（PTA会長）



○学校より 今村 洋仁校長 小野 優子教頭 米山 茂雄教務主任

今回の学校関係者評価

- ① 学校による自己評価書を受けての、学校関係者評価委員による意見の集約
- ② 評価書の作成と学校への還元

これまでの経過

6月20日	第1回学校関係者評価委員会
8月30日	第2回学校関係者評価委員会 評価書 作成
9月	学校関係者評価書 職員報告（職員会議）
9月	評価書 学校関係者評価委員に配布 市教委に提出

自己評価の結果を受けて

①学校教育目標，経営方針・学校運営について

◎職員室でなんでも話ができるという雰囲気は素晴らしく、大切なことだと感じる。忙しい中でもこのような時間をもってほしい。子どもの課題や職員自身の困りごととも伝えることで、学校の課題や悩みの部分が見えてくる。また「みんなでこうしよう」という対策も自然に見えてくるだろう。今後も雰囲気の良さを継続させてほしい。

○職員同士が学び合う機会を作ることにに関して、校内研を有効に使うことも一考である。少しの時間でもいいから、学び合いの時間を作って、ベテラン教師に自分の「うまくいった学習体験や方法」を紹介してもらったらどうだろう。管理職から見て、本校職員の素晴らしい教育実践を他の職員に紹介することも良い。

▼「専門性の向上」は大切なことであり、教師として授業に臨む以上、授業の準備を十分して子ども達に分かる授業を提供することは基本である。しかし、様々な事情から、職員の自己研修や教材研究の時間がとりにくいという面があることは否めない。大胆な思考でできる工夫をしながら、そのような時間を確保していくことが必要ではないか。例えば、朝の15分の活動時間をなくし朝の会の時間を短時間で行って1校時の授業開始時刻を早めると、児童の下校時刻が早まり、職員の放課後の時間が生み出せる。また、朝の15分の活動時間を教科の学習時間としてモジュール的に扱い、週三回の確保で1時間を生み出すこともできる。これからも創意工夫していったほしい。

⇒(学校から)

学校としても働き方改革と並行して、職員の教材研究や研修時間の確保は最重要課題だと考える。いただいた助言を参考に前向きに進めていきたい。

○今後、社会的情勢で専科教員を増やす方針がある。児童の学力を保証し、職員の多忙化解消という面でも、求められる方向だろう。本校は小規模校ではあるが、フリーの教員を増やし、特に高学年では専科による教科学習を設けることが大切になると思う。

○職員の心の健康のために働き方改革について、今後も進めていく必要があるだろう。職員の勤務時間の余剰を減らすためにも、学校全体でゆとりの時間を生み出す工夫や管理職からの積極的な声掛けなどを行ってほしい。

②児童理解，生徒指導

▼児童の相互理解の面で、学年を超えた縦のつながりが弱まっていることは課題である。コロナ禍による影響もあると思うが、本校は小規模校であるからこそ児童の縦のつながりが生きる面が多い。運動会や児童会活動などを通じて、高学年の児童にはリーダー性を、低学年児童には上級生を見て学ぶ姿勢を育ててほしい。また、職員自身も、そのようなことを強く意識して、少

ない機会を有効に使ってほしい。

⇒(学校から)

実際に、児童会活動がこれまで通りに行えない中で、児童の縦のつながりの機会が非常に少ないことを課題として感じている。「小規模校だからこそ」という言葉の重さを深く受け止め、With コロナの時代に「できる工夫」と「少ない機会を有効に使う努力」をしていきたい。

○子ども達の安心感の醸成ややいじめの問題は、気になることである。保護者としては、担任が連絡帳や電話などを通して、限られた時間の中でもまめに連絡をしてくれることがありがたい。今後も、このような姿勢を大切にしてほしい。

○あいさつが自分からできないという現実があるが、こちらからあいさつをすると返してくれる児童は多い。返事をしっかり返してくれるという点で褒めたい。求めるだけでなく、大人自身が進んで子どもに声をかけるということも大切にしていきたい。

③保護者・地域連携

○地域との関わりという点では、「源小の子どもを見守る会」の活動や「子ども110番」の取り組み、地域のお年寄りグループ「にこにこサロン」の農業体験支援、小林建設さんの体験学習の場の提供など、多くの支援的な関わりがある。今後、小中一貫教育の推進からコミュニティスクールの運営までを見据えて、地域との関わりを積み重ねていくと同時に、新たな関わりづくりを進めることも大切である。また、学校と地域とが力を合わせてやっていくことも大切だが、同時に地域の教育力も高めていくことで、地域連携の土台造りとなることも念頭に置きたい。

⇒(学校から)

コミュニティスクールの設置に向けて、地域との協働・連携をより一層深めていかなければならない。それは、組織づくりや運営に関するだけでなく、児童の教育課程上の学習面においてもさらに強い支援となるだろう。学校としても、積極的に働きかけていきたい。

○防災学習については、数年前から防災学習の指定を受けて本校は熱心に取り組んできている。これからもできる努力をしてほしい。とくに御勅使川をめぐる水害の歴史についての学びは、この地域ならではの課題として今後も続けてほしい。2年生の生活科や5年生の理科などに位置付けていたらどうだろう。

児童アンケートの結果を受けて

①学習・授業について

○今後、コロナ禍の学習指導の在り方の一つとして、療養期間や自宅待機期間にある児童の学習機会の確保が大切になる。オンライン授業なども積極的に取り組んでほしい。

②生活面について

▼異学年同士の交流が減っていることが残念である。本校は少人数だからこそ、異学年から学ぶ場を大切にほしいし、上級生から下級生にいい伝統をつないでほしい。

③学校外での生活について

▼あいさつについては、子ども達はよくあいさつをしている意識を強くもっているが、朝の登校指導に関わって見ると、自分から挨拶できる児童は少ないと感じる。大人から積極的に声をかけると返事を返してくれる、家庭でのしつけが整うとできるなど、あいさつに対する大人の姿勢も影響してくる。家庭も含めて、大人が積極的な姿勢を示していくことが大切になる。

⇒(学校から)

朝、玄関で児童を迎える際、職員からさわやかにあいさつをするよう心掛けている。少しずつであるが、自分から挨拶をする児童が増えていると感じる。大人が手本を示すことは非常に大切だと感じるので、これからも職員からの発信を続けていきたい。また、学校便りなどを通して家庭にも協力を呼び掛けていきたい。

○自主的にあいさつをする子ども達の雰囲気も大切になる。上級生の元気にあいさつをする姿、登校班内の下級生でも大きな声で挨拶をする児童など、あいさつに向かう子ども内の雰囲気を醸成していきたい。特に、上級生がちょっと頑張っって良い手本を示すことができるように、学校でも声をかけていってほしい。

④家の人との会話について

▼近年、山梨には大きな災害がないので、保護者と児童の会話の中に日常的に災害に関する話あまり出ないのかもしれない。ただ、いつかは起きるだろう災害を真摯に捉え、その時にいかに行動したらよいかを日常から親子で話しておくことは必要だろう。ハザードマップなどを利用しながら、災害に対する危機管理の意識がもてるよう、学校からも各家庭に呼び掛けてほしい。

⇒(学校から)

本校では、防災学習会(2・4・6年)に保護者も参加していただき、親子で防災についての学びを深める機会としている。同じ体験をもつことで、親子で防災への意識が高まり、共通理解を通して会話も深まるだろう。ただ、コロナ禍において保護者の参加ができない現状でもあるので、学校としては学校便りや学年だより等で積極的に話題として出し、家庭で親子が話をできるようにしていきたい。

○例年、地域での災害訓練などでは全家庭に呼びかけて子どもも含めた家族全員の参加体制をとってきたが、近年はコロナ禍のため必要最低限のこのみ、最小の人数で行わざるを得ない状況である。危機意識が低下してしまっていることは否めない。学校では避難訓練などの行事を大切に、子ども達への危機意識の醸成をお願いしたい。

携帯電話・スマートフォンの使用について

OSNSの使い方・インターネットの利用については、親子でその危険性や使い方について学ぶ時間が必要である。とくに危険性については、ちょっとした間違いで自分だけでなく人を傷つける危

険があったり、一度トラブルが起きると大変なことになったりすることもある。そのようなことを親も分かっていない現実があるように感じる。外部の専門機関による出前授業は、そのような現状をしっかりと教えてくれる良い機会である。具体的な事案を実際に聞いたり映像で見せてもらったりすることで親子での良い学びの場としてほしい。

⇒（学校から）

学校では、5年生において山梨県教育庁生涯学習課が行う「スマホ安全教室」を開催している。保護者にも呼びかけ、身近なスマホの危険について親子が一緒に学ぶ場として設定している。また、昨年度は学校保健委員会で「ネットの危険」について専門家から、お話をいただいた。保護者からは、あらためてネットの恐ろしさを感じたという声が多数届いた。これからも学校でできる学びの場を用意し、児童だけでなく保護者にもネットの危険性を知らせていきたい。